

## 保育の中の物語(9)

# 涙の「一緒にやろう」

「ごめんなさい」ではなくて

岸井慶子

前月号の続き。五歳児のU子とI子の二人がタンバリンとカスターネットと口三味線で一曲演奏しようとしている。実に楽しそうだ。一方、すぐ近くで、M子はミュージックベルを目の前にずらりと並べ「ドレミの歌」を一人で奏でようと真剣に音を探っている。やがてU子・I子はほかの楽器も使いたくなる。そしてM子に勇気を出して「貸して」と頼むが、M子に拒否され「もつとベルを貸してほしい。Mちゃんばかりたくさん使っているけれど、私たちも使いたい」と抗議がエスカレートする。担任の先生や周囲の友達を巻き込んで、交渉やら、M子への説得やら、相談やらが始まる（ここまではよくある出来事で、予想通りともいえるだろう。そんな思いで観察していた）。



さて、交渉成立。交替の条件であった「三曲」の歌や合奏も終わり、いよいよU子とI子の二人がミュージックベルを全音使える順番だ。待ちに待った時がやってきた。U子もI子も張り切って、いそいそと自分たちの前にミュージックベルを並べ始める。「そうだ、もう一つ椅子を持ってこなくちゃ！」とI子は大急ぎでU子の隣に椅子を持ってきて並べる（なんだかウキウキとした雰囲気です。VTRを撮っているこちらにも楽しさが伝わってくる）。

「さあ、今度こそ」とばかりに、I子が机の上のベルに手を伸ばしたその時、先にベルを並べ始めていたU子の手がI子の手を払った。

「えっ、なんで。私だっけ使いたいの」とI子が抗議する。I子の不満に気が付いたU子は「いいよ」とちょっと不満（不可解？）そうな表情で、I子の方へベルを二〜三本押しやる。しかし、I子の怒りは収まらず、プイっとして「いらぬ」と激しくそのベルを押し返す。そしてI子はU子に背を向ける。背中が怒りが見える。

思いがけず自分に対して不満をあらわにしたI子に対してとまどったのか、U子は黙って立ちつくしている。

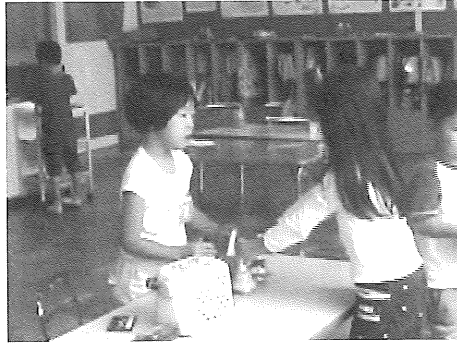
周囲の女兒たちも二人の感情のぶつかりに気づき、その場に緊張感と沈黙が流れる。気まずい雰囲気はその場を覆う（こういう時、子どもたちは実によく



その状況を感じ取り、よく見ている。その一瞬、周囲の声や音が消える。

その時、M子がI子に近寄り、何やら耳打ちする。耳打ちしながらU子をちらりと見る(何を耳打ちしたのかわからないが、このM子の行為をどのように解釈したらよいのか、筆者にはいまだにわからない。M子は二人のいさかいに乗じて自分のうつぶんを晴らしたのだろうか。I子の悔しい気持ちに共感を示したのだろうか。いずれにしても、それを「内緒話」という形で表現したM子の心の動きが腑に落ちない)。

M子の内緒話を見て孤立感を感じたのだろうか、U子が「うわーん」と大きな声で泣き始める。「ううえーん、うをーおん」と涙をぼろぼろ流して、人目もはばからず泣きじゃくる。今まで耐えていたものが、ついに耐えきれなくなった、という雰囲気。I子は困ったような顔でU子の顔を見つめる。今度はI子が泣きそうになる。I子は口をへの字に結び、涙を浮かべながらも、声をあげて泣いているU子の頭をなでる。机の反対側でじっとその様子を見ていたA子が、泣いている二人に向かって「そんなに泣いて、お別れの時みたいだよ」と明るく言い聞かせるような調子でいう。慰めるつもりなのか、事態を収拾しようとするつもりなのか。S子も黙って見つめている。いつの間にかやってきたのか、B男が心配そうな表情で二人を見ている。内緒話できっかけをつ



くったM子はどこかにいってしまふ。

少し前までM子らと一緒に合奏を楽しんでいた仲間のH子が、遊戯室から戻り、いきさつがよくわからないままに「片付けだよ。お帰りのしたく」と言いながら、机の上のミュージックベルやほかの楽器をどンドン棚に片付け始める。

I子が一度片付けられたベルを棚から全部取り出し、泣いているU子の前に黙って並べ始める。U子の表情を気遣いながらまるで「Uちゃん、全部使ったいいよ」とでもいうような様子。

そんなI子の無言の申し出に対して、U子は泣きじゃくりながらも「いっじよにやどう（一緒にやろう）、いっじよにやどう（一緒にやろう）」といい、ちよど半数のベルをI子のほうに押し出す。I子が応じ、二人で最後の一曲を合奏した。A子やH子、S子らはそばで一緒に歌った。歌声がその場の雰囲気を和ませた（U子の心の底から必死に絞り出すような「一緒にやろう」を見ながら、筆者自身思わず涙を流し、歌のもつ力を再認識した）。

突然の嵐のような出来事だった。ぶつかり合いの終わりが「ごめんね」「いいよ」ではなく、「一緒にやろう（私は「あなたと一緒にやりたいの）」だったところに教えられたエピソードだ。

（鎌倉女子大学短期大学部教授）